ピー・エス・シー

「製本管理システム パワーアップ」導入

大手出版社を中心に書籍製本を行う㈱中永製本所（さいたま市岩槻区真福寺1400、田中一紀社長）は、ピー・エス・シー㈱の「製本管理システム パワーアップ」を3月に導入し、注文書や納品書、在庫など、これまでエクセルで個別に管理していたデータを一元管理できる体制を構築した。過去5年分の多岐にわたるエクセルデータを製本管理システムで運用することにより、事務処理作業の大幅な効率化を実現するなど、短期間で導入効果を発揮している。

事務処理作業を効率化

エクセルデータのシステム運用で効果発揮

中永製本所

同社は㈱中永製本所としては平成8年の創業であるが、前身の㈱田中製本所から数えると、今年で創業74年の歴史を誇る。創業当初から出版社を直接取引先とした業務を営んでおり、ここ数年は印刷所からの取引も増えてきている。

主な設備としては、2つの製本ラインを所有し、生産能力は月産60万冊が可能。このうち1ラインには、このほど24の全鞍に乱丁検査装置を取り付け、さらなる品質向上を実現した。また、取引先の在庫を預かる大規模な倉庫を保有して在庫管理を行っていることも、同社の特長である。

田中 社長

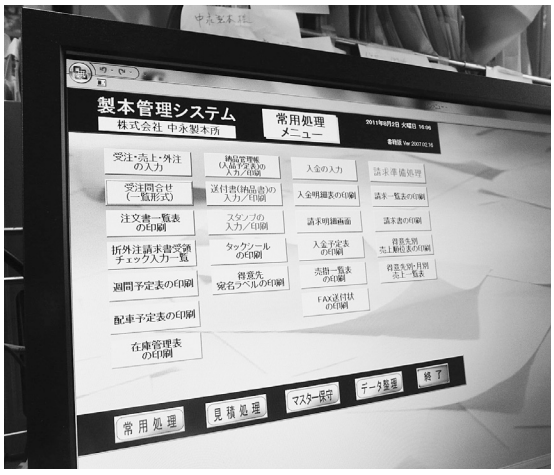
データの一元管理を目的に導入

今でこそ、事務処理に関わるデータの一元管理を実現している同社であるが、もともとはパソコンはあまり得意な会社ではなかった、とは田中社長の弁。「パソコンを導入する7年前までは、注文書や納品書など、事務処理に必要な書類のすべてを手書きで作成していた」と話す。

アナログ仕事からの脱却は早いとは言えなかった同社であるが、7年前にパソコンを導入したことを機に、事務処理に関連するデータをエクセルで入力することを開始した。ただ、それぞれが単独のデータで連動していないため、運用面でもっと効率的にできないかと感じていた部分もあったようである。

しかし、単独のデータであっても7年分が蓄積され、それは同社の貴重な財産となり、田中社長はシステムとしての運用を考えるようになったという。

「年月が経つにつれ、このデータとこのデータを一緒に管理できたら便利だとか、自分の中でデータ運用のイメージができあがってきた。そのイメージを要望どおりに形にしてくれたのがピー・エス・シーの製本管理システムであった」と田中社長は語る。



「製本管理システム パワーアップ」のメニュー画面

検索機能で事務処理作業の効率化を実現

田中社長がデータを運用していく上でイメージしていたという機能。その一つは、膨大なデータをいつでも簡単に引き出せる充実した「検索機能」であったという。

「エクセルで管理していた頃は、過去の履歴などを調べる際にも記憶を頼りに探すしかなかった。しかし製本管理システムでは、社番や書名、ISBNなど様々な条件で検索できるため、探したいデータを瞬時に引き出すことができ、データを探す手間とストレスから解放された」（田中社長）

同社では製本管理システムを導入する際、過去5年分のエクセルデータを載せているため、過去にトラブルが発生したリピート仕事の履歴などを調べる場合も、検索機能で簡単に抽出できるなど、これまでのデータ蓄積を活かし、導入後すぐにその効果を発揮している。

「中永製本所様はデータの連動ができていなかっただけで、仕組みとしてはでき上がっていたので、当社は過去5年分の多岐にわたるエクセルデータを分析・整理し、製本管理システムに乗せるということを中心にカスタマイズを進めた」（ピー・エス・シー 原田敏明社長）

在庫を預かる大規模な倉庫を保有

同製本管理システムはユーザーに最適なシステムにカスタマイズできることが特長。同社はこれまで蓄積したデータを最大限に活かした導入ができたと言えるだろう。

生産管理・顧客管理もできるシステムを目標に

「当社は本当に初歩的な段階からのスタートであったが、とりあえず事務処理に関連するデータは全て一元管理できるようになった。将来的には生産管理・顧客管理なども視野に入れながら、同システムを活用していきたい」（田中社長）

電子出版など出版業界が激動の波に晒されている中、同社は自社の技術力・生産力をさらに高めるとともに、同システムを活用しながら、戦略的に荒波を乗り越えていく考えだ。